

Title	国王ルイ・フィリップの養育掛ジャンリス夫人の女子教育論 ： ジャンリス夫人の女子教育論 （2009年度コロキウム）
Author(s)	村田, 京子
Citation	女性学研究. 2010, 17, p.1-22
Issue Date	2010-03
URL	http://hdl.handle.net/10466/12672
Rights	

2009年度 コロキウム

国王ルイ・フィリップの養育掛
ジャンリス夫人の女子教育論
— 『アデルとテオドール』 —

村田 京子

ジャンリス夫人（カロリーヌ＝ステファニー＝フェリシテ・ド・ジャンリス伯爵夫人）（1746－1830）（図版1 参照）は、19世紀初頭において、スタール夫人を凌ぐほどの人気を博した女性作家で、小説、戯曲、子ども向けの物語、教育書、エッセー、回想録など様々なジャンルの140にもものぼる著作を残した。彼女の著作は出版されるやたちまちベストセラーとなり、英語、ドイツ語、イタリア語、トルコ語、ヘブライ語など様々な言語で翻訳されてヨーロッパ中にその名が轟いていた。さらに彼女は後に国王となるルイ・フィリップ（図版2 参照）の養育掛としても有名で、生涯にわたって何人もの子どもを養子にし、その教育に専念するほど、教育が彼女にとって天職であった¹⁾。ジャンリス夫人は教育に関する著作を数多く出版しているが、特に女子教育に力を注いだ。19世紀の作家スタンダールも妹のポーリーヌにジャンリス夫人の著作を読むよう勧めている²⁾。したがって、本稿では、ジャンリス夫人の代表作『アデルとテオドール』を取り上げ、そこに現れる彼女の女子教育論がどのようなものか、検証していきたい。

1 オルレアン家の養育掛の著作『アデルとテオドール』

ジャンリス夫人の『アデルとテオドール、または教育に関する書簡 一王族および男女の子どもに関する3つの異なる教育プランを含む』（図版3 参照）は、1782年に出版された。それはちょうど、彼女がオルレアン家の養育掛（Gouverneur）として公式に任命された年にあたる。

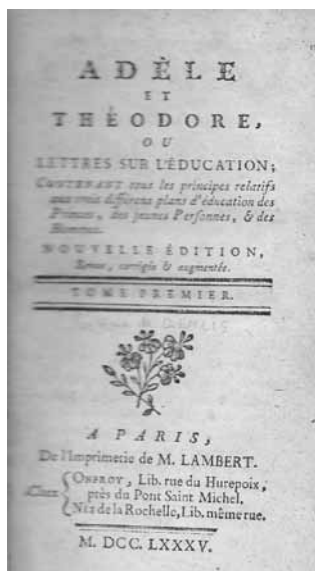
2 国王ルイ・フィリップの養育掛 ジャンリス夫人の女子教育論



図版1 ジャンリス夫人 (22歳頃)



図版2 国王ルイ・フィリップ
(1830-1848)



図版3 ジャンリス夫人
『アデルとテオドール』(1782)



図版4 シャルトル公爵
(後のフィリップ・エガリテ)

ジャンリス夫人は1772年にオルレアン公の長男、シャルトル公爵（1785年からオルレアン公となる。後のフィリップ・^{エガリテ}平等：図版4参照）の夫人付きの女官としてパレ・ロワイヤルに上がり、シャルトル公の愛人となる。その彼女がオルレアン家の教育を統括する養育掛として、シャルトル公の4人の子ども（長男ヴァロワ公爵、次男モンパンシエ公爵、三男ボージョレ伯爵、長女アデライド・ドルレアン；長男のヴァロワ公爵が後の国王ルイ・フィリップ）の教育を一手に引き受けることになった（図版5参照）。オルレアン家はブルボン家に継ぐ王族で、王族の養育掛には従来、礼儀作法や典礼に長けた男性が就き、輝かしい功績を挙げた退役軍人または宮廷の高官から選出される習慣であった。その地位に就いたのが女性のジャンリス夫人であっただけに、彼女の養育掛就任はパリ中に大きなセンセーションを引き起こした。当然のことながら、宮廷人の嫉妬や反感は大きく、彼女への誹謗中傷が繰り広げられた。とりわけ、シャルトル公の愛人の立場を利用したという非難が彼女に集中した。



図版5 ハープの練習

左から：ジャンリス夫人、アデライド・ドルレアン、養女のバメラ

こうした時期に出版された彼女の著作が注目を浴びたのは、言うまでもない。しかも、当時の人々からはモデル小説「モデルとなっている実在の人物などをつかむ鍵となる言葉がそれとなく呈示されている小説」とみなされ、モデルとされたモンテッソン夫人「ジャンリス夫人の叔母。社交界の指南役であり、ジャンリス夫人のライヴァルでもある女性」など周囲の人々を苛立たせた³⁾。それも読者の関心を一層掻き立てる要因となった。『アデルとテオドール』はたちまち英語、スペイン語、ドイツ語に翻訳され、ジャンリス夫人の名声はヨーロッパ中に広がった。では、この著作がどのようなものか、次に見ていくことにしよう。

2 教育と教育者の絶大な力

『アデルとテオドール、または教育に関する書簡』は、タイトルから推察されるように、ルソーの『新エロイズ』（1761）に倣って書簡体小説となっている。小説全体が、ダルマヌ男爵夫妻とその親しい友人との間で交わされる69通の手紙で構成され、全3巻のうち第1巻は、男爵夫妻がバリの社交界を離れてラングドックの田舎の屋敷に二人の子ども（6歳のアデルと7歳のテオドール）を連れて引きこもり、実施した理想の教育が語られる。第2巻では4年間、ラングドックの屋敷で教育を施した後、実地教育として、夫妻が子どもたちとブルターニュ地方の慈善施設を訪れたり、イタリア各地を旅することで彼らに様々な試練や経験を味あわせる様子が描かれる。第3巻では知的・精神的成長を遂げた子どもたちがパリに戻り、幸せな結婚をする結末となっている。しかしこの小説の主眼は、子どもたちの成長物語ではなく、むしろ手紙の中で展開される詳細な教育方法や教育論の方にある。この本の副題「王族および男女の子どもに関する3つの異なる教育プランを含む」が示す通りである。では、なぜジャンリス夫人は小説の形式を取ったのだろうか？

彼女が小説の形にこだわったのは、『回想録』の中で明言しているように、道徳論や教育論では無味乾燥に陥りがちで、小説で「同じ考えが筋立ての中に活かされると、その思想は必ずはるかにいい形で展開される。その結

果、より役立つものとなる⁴⁾」と考えたからだ。彼女は著作の一つで、小説の価値について、次のように説明している。

美德を揺るぎなきものとする感情を発達させないような書物や、有益な考えを提供しないような書物は全てくだらない作品に過ぎず、その魅力や文体がどのようなものであれ、再読する価値はない⁵⁾。

要するに、彼女にとって小説は読者の美德を養う装置に過ぎない。『アデルとテオドール』には、様々なエピソードが盛り込まれ、読者の関心を引き付ける工夫が凝らされている。その一つを例に挙げると、ロマン・ノヴァール暗黒小説「古城や廃墟などで繰り返される怪奇的な物語」風に味付けされたエピソードとして、9年間、嫉妬深い夫によって地下の洞窟に閉じ込められたC公爵夫人の話がある。暗黒小説の傑作、ルイスの『マンク』(1796)にも、修道院の地下牢に閉じ込められた女性が登場するが、ジャンリス夫人の場合、『マンク』のような暗い情動の世界ではなく、強い信仰の力によって情熱を克服した女性の姿が浮き彫りにされる。C公爵夫人の手記を読んだダルマヌ夫人は、次のような教訓を引き出している。

私たちが気づいたことは、[...] 宗教がなければ、地下牢は彼女の墓になっただろう、またはたとえそこから出られても呆けてしまったか、気が狂ってしまっただろう、ということでした。こうしてアデルとテオドールは今や宗教について正しい考えを持つことができたのです⁶⁾。

このように、ジャンリス夫人の小説は教育論の色合いが濃く、ダルマヌ男爵夫妻(特にダルマヌ夫人)が作者の代弁者となって、アデルとテオドールと同様、読者を教育しようとしていた。それがジャンリス夫人にとって、作家の社会的使命であった。

彼女はこの小説の中で、17世紀の作家フェヌロン[著書に『女子教育論』、『テレマックの冒険』がある]や、イギリスの啓蒙思想家ロック[著書に『教育論』がある]などの名を挙げ、彼らの著作を引用することで、自らの教育論に

権威づけを行っている。さらに、ルソーの『エミール』(1762)に負うところが大きく、ルソーへの言及が最も顕著である。しかし、教育に関する考えにおいて、ルソーとジャンリス夫人との間には根本的な違いが見出せる。ルソーは性善説を唱え、社会や文明が人間を腐敗・墮落させると批判し、「自然への回帰」を呼びかけた。彼にとって教育者の役割は、腐敗した文明社会から子どもを隔離し、子ども本来の性質が自由に伸びるための条件を整えること、子どもの性質を矯正せず成長を見守ることにあった。すなわち、「『何もしないこと』が絶対的な教育学的必然⁷⁾」で、それが彼の説く「消極的教育 (éducation négative)」の本質であった。それに対し、ジャンリス夫人は、人間本来の美德を引き出すには教育が必要不可欠だと考えていた。『アデルとテオドール』のエピグラフとして掲げられたアディソンの引用が、それを如実に物語っている。

私は教育を受けていない人間の魂を、石切り場の大理石とみなしている。大理石は、石工の才能によって色が引き出され、表面が磨かれ、その中心に閉じ込められた縞、斑点、色のついた曇りが露わになるまでは、その生来の美しさを一つも表に出してはいない。このように教育が幸福な本性に働きかける時、美德の芽を伸ばし、美点を完璧なものとする。教育がなければ、こうした美点は決して知られることはなかったであろう。(47)

さらに、ジャンリス夫人は作中で、ダルマヌ男爵に次のようなルソー批判をさせている。

ルソーは、人間は本質的に善良に生まれ、本能に完全に任せれば必ず善良になるだろう、などと非常に雄弁に語っています。私はその考えは間違っていると思います。人間は本能に従えば、必ず復讐心が強くなり、その結果、魂の偉大さも寛容な心も持てなくなるでしょう。(110-111) [強調は作者自身]

ジャンリス夫人は、キリスト教の原理に基づく教育のみが人間本来の欠点や悪徳を正し、美德へ導くことができると考えていた。ダルマヌ夫人の

娘のアデルも完璧な性質に生まれついたわけではなく、軽率で激しい気性という大きな欠点を持っていた。アデルは親には従順だが、家庭教師など彼女が恐れる必要のない者には短気で聞き分けが悪かった。しかし、子どもを叱って強制的に服従させるのではなく、「時間、理性、習慣がその性格を完全に変えてしまうまで、いつも子どもから眼を放さないこと」(146)が、夫人の教育法であった。そのために子どもに宗教的感情を植え付け、「人生のいついかなる時も神さまが見て聞いている」(153)と考えることで、悪い行いを子ども自らが正していくよう仕向けている。その上、ダルマヌ夫人は娘の顔の表情を素早く読み取り、彼女の嘘や隠し事を見抜くことで、いかなる行為も「母親の絶対的な全知の眼差し⁸⁾」から逃れられないことを娘に悟らせている。言わば、教育者が神の役割を果たしているわけだ。

全てを知り、全てを洞察する教育者の神のような視線は、小説全体のライトモチーフとして、至る所に見出せる。例えば、食いしん坊のアデルが10個のタルトレットを一気に食べて「大食の罪」を犯した時、ダルマヌ夫人はそれを黙って見過ごす。一見、ルソーの「消極的教育」の実践のように見えるが、そうではない。その後、アデルは消化不良で病気になり、腹痛で苦しむ。その段階で、娘に節制の重要性を説くのだ。彼女は理屈ではなく経験によって教え込む手法を取り、最後にアデルに向かって次のように言う。「あなたを見ていないように見える時でさえ、私はあなたの一挙手一投足を完全に見ています」(246)。それは、ディディエ・マソーが指摘しているように、教育者ジャンリス夫人の「限りなき権力のパノプティックな（一目で全てが見渡せる）夢⁹⁾」の現れと言えよう。

物語の最後で、18歳になったアデルは「もうすでに女性特有の全ての欠点を矯正し」(587)、理想的な女性に変貌している。そこには教育の力に対するジャンリス夫人の全面的な信頼が見出せ、絶大な力を揮う教育者像が浮かび上がってくる。ダルマヌ夫人自身が物語の最後で、次のように断言している。

私の教育法は良いもので、私の教育システムは根拠のないものでは決してなく、私の作品 [=『アデルとテオドール』] は単なる小説では決してありません。(627)

3 ジャンリス夫人の教育法

『アデルとテオドール』では、副題にあるように、王室の男子教育と男女それぞれの教育プログラムが取り上げられている。しかし、王族教育に関しては、王太子の養育掛ローズヴィル伯爵の手紙が断続的に挿入され、その教育方針が簡潔に語られるだけで、エピソード的な扱いでしかない。テオドールとアデルの教育は母親のダルマヌ夫人がほぼ一手に引き受け、その教育プログラムには男女による差異はほとんどない。相違点として挙げられるのは、テオドールに課せられるラテン語の学習と軍人教育で、軍人として必要なドイツ語と、要塞を築くための幾何学の勉強に言及されるだけである。

ルソーは『エミール』において、女性を男性に従属した弱者とみなし、「女性とはとくに男性に好かれるために作られている¹⁰⁾」として男性とは違う教育法を提示している。水田珠枝はルソーの女性論を次のように要約している。

「…」彼 [=ルソー] の女性論をつらぬく基軸は、男性と区別された女性の性的特質を、肉体的特質、心理的特質、社会的地位と融合させて、女性の劣等は不平等な社会がつくりだしたものではなく、「自然的なもの」であり、その「自然」にふさわしく女性は教育されるべきだということなのである¹¹⁾。

保守的な価値観の持ち主であるジャンリス夫人は、ジョルジュ・サンドを初めとする後のフェミニストとは違い、こうした考えに正面から異議を申し立てることはない。しかし、知性における女性の劣等性はきっぱり否定している。例えば、1811年に出版した『フランス文学に対する女性の影響について』の中で、彼女は女性の「自然的な」特質＝劣等性という観念への反論を試みている。すなわち、女性がこれまで素晴らしい悲劇や立派な叙事詩を生み出してこなかったことが、女性の劣等性の証だとみなされてきたが、それは女性が正規の教育を受けられなかったことに起因する、というのだ。そして彼女は、「何千人もの尼僧や家庭の母親が違った教育

を受けていれば、[…] 素晴らしい悲劇を作り出したことであろう¹²⁾」と結論づけている。こうした考えが『アデルとテオドール』の中に反映され、男女同じ教育を推進する原動力になった。

さらにタイトルが『アデルとテオドール』と、アデルが先に位置しているように、この小説ではアデルの教育が主体となり、テオドールの教育はそれに付随する形で述べられている。したがって、女子教育が最大の焦点となっている。

ジャンリス夫人の教育法そのものは全く新しいものではない。ロックやフェヌロン、ルソーの他にも、ランベール侯爵夫人〔18世紀初めに有名なサロンを主宰し、著書『母親から息子に与える忠告』『母親から娘に与える忠告』で教育論を展開している〕やラ・アルプなどが提唱する古典的な教育原理が借用されている¹³⁾。ガブリエル・ド・ブログリによれば、彼女の独創性は、「専門家たちが伝統的に抱いてきた関心と、[…] 彼女が自己流に解釈し直したフィロゾフ〔啓蒙思想家〕たちの進歩主義的思想 […]、さらに最も近代的な手法とテクニックを統合したこと¹⁴⁾」にある。

ジャンリス夫人はまず、社交生活に明け暮れ、子どもの教育をなおざりにしてきた貴族階級を批判し、小説の中では「良い母親」(＝ダルマヌ夫人)と、「悪い母親」(＝リムール子爵夫人)という二項対立の図式のもと、勧善懲悪的な教訓をもたらしている。すなわち、社交界で快樂のみを追求してきた「悪い母親」、リムール夫人は娘の教育を怠った結果、その罰は娘に降りかかる。娘はその軽薄さや浪費癖が正されることなく成長し、最後は悲惨な人生を送る羽目に陥る。そこには、母親自身の手で子どもを育てるべきだとするルソーの考えが反映されている。ダルマヌ夫人が子どもたちを連れてラングドックの田舎に引きこもったのも、ルソーに倣って、誘惑と虚飾に満ちた文明社会から子どもたちを遠ざけるためであった。このように、従来の貴族教育を否定するところから、この小説は始まる。

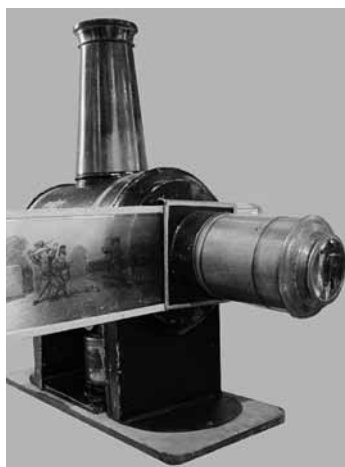
4 ジャンリス夫人の読書プログラム

ジャンリス夫人の教育論で最も特徴的なのは、子どもの年齢に応じた教

育を段階的に実施することである。彼女はとりわけ読書に重きを置いたが、たとえ優れた書物であれ、子どもが理解できない年頃に無理やり読ませることには異議を唱えている。作中でダルマヌ男爵が次のように言っている。

かなり奇妙なことに気づいたのですが、最高の教育を受けたと言われている人々が、一般的に、読書に一番関心がない人たちなのです。それもそのはずで、こうした育ちの良い人は14歳で、優れたフランスの書物を全て読んでしまっているからです。その年では本の価値がわからないため、非常に退屈な印象しか残らず、その結果、当然のことながら彼らは読書を嫌い、読書を断念してしまうのです。(300)

こうした観点から、ダルマヌ夫人は2つの教育方針を立てている。すなわち、子どもが理解できることしか教えないこと、そして、子どもが遊びながら学べる機会を逃さない、ということだ。したがって、アデルが6歳になるまでは、本格的な書物を読ませることはせず、部屋や廊下の壁に歴史や聖史、神話を主題とするタピスリーや世界地図を張り巡らした。さらに、歴史から400～500の主題を取り出してガラス板に描き、幻燈（図版6参照）で映して、娯楽として子どもたちに見せることで、歴史や地理を自然に覚え込ませた。これは、ジャンリス夫人が実際にルイ・フィリップに行った教育でもあった。



図版6 幻燈

アデルが6歳になると、ダルマヌ夫人自らが作ったお伽噺（ジャンリス夫人の『城の夜のつどい¹⁵⁾』）を読ませ、7歳になると聖書やデピネ夫人の『エミリーとの会話』などを読ませる、10歳で『ロビンソン・クルーソー』やダルマヌ夫人が書いた教育劇（ジャンリス夫人の『少女のための

戯曲¹⁶⁾』を読んで芝居を演じさせ、そのレジュメを書かせる。13歳でラファイエット夫人の『クレヴの奥方』を読ませ、16歳でウェルギリウスの『アエネイス』やセヴィニエ夫人の書簡、ラ・フォンテーヌの『寓話』、英語でリチャードソンの『クラリッサ』、イタリア語でタッソーの『解放されたエルサレム』を読ませる。17歳でヴォルテールの歴史物やラシーヌ、コルネイユの古典劇、という風に年齢別に細かく子どもに読ませる本を厳選し、綿密な読書計画を立てている。

『アデルとテオドル』の巻末には補遺として、6歳から22歳〔アデルは18歳で結婚したが、結婚後も母親の監視の下、読書続けた〕までアデルに読ませた本の詳細なリスト（ジャンリス夫人自身の著作も含む）が掲載されている。言わば、この本の読者が参考にすべき読書プログラムが提示されているわけだ。選ばれた書物の範囲は古典から同時代まで幅広く、フランス語の文献だけではなく英語、イタリア語の原文も含み、文学や歴史、哲学、さらにビュフォンの『博物誌』など最新の科学的文献も含まれている。まさに、この時代に特徴的な「百科全書的な野心¹⁷⁾」が看取できる。

ダルマヌ夫人がアデルに読ませた書物の中には恋愛小説や、ジャンリス夫人が忌み嫌うヴォルテールなどフィロゾフ派の著作も含まれている¹⁸⁾。小説は、男性よりも感受性が強いとされる女性の想像力を過度に掻き立て、心を惑わすとしてジャンリス夫人の批判的であった。それは当時の保守的な考えを代弁するもので、19世紀においても、女性が小説を読むことの危険性が盛んに論じられた。その典型が、フロベールの『ボヴァリー夫人』である。主人公のエンマ・ボヴァリーは、小説のような情熱的な恋愛を夢見て結婚するが、平庸な夫に嫌気がさし、理想の愛を求めて恋愛遍歴の末、破滅していく女性として描かれている。ジャンリス夫人にとって「情熱」は、危険で束の間のものに過ぎず、穏やかで理性的な愛情が何よりも優先される。彼女が理想とする「慎ましく、分別のある貞節な女性」は「逆上した情熱から免れた」（556）存在で、情熱を掻き立てる小説は危険であった。しかし、こうした小説を読むことを禁じると、かえって娘の好奇心を煽ることになる。彼女はむしろ、母親の監視のもとに小説を読ませることを選んでいる。ダルマヌ夫人は次のように言っている。

12 国王ルイ・フィリップの養育掛 ジャンリス夫人の女子教育論

彼女 [= アデル] はこれらの小説 [『クレージュの奥方』、アベ・プレヴォーの『クリーヴランド』 など] を13歳で、私と一緒にすでに読んでいます。だから彼女は現在、危険なしに再読できるでしょう。最初の印象がすでにできていますから。彼女は似たような本の中には高揚した想像力の錯乱しか決して見ないでしょう。(556)

フィロゾフ派の書物に関しても同様で、彼女はその中で誤った考えだと思ふ箇所を抜粋して、その「欠点」を娘に指摘させる手法を取った。このように、ダルマヌ夫人の教育プランは、徹底した管理と監視のもとに実行された。

5 ジャンリス夫人の教育の近代性

ダルマヌ夫人 = ジャンリス夫人の教育の新しさ、その近代性は知的教育だけではなく、身体的な鍛錬や精神的な鍛錬（闇の恐怖に慣れさせる訓練など）など総合的な教育を行い、食べ物や衛生状態にも気を配っていることだ。ダルマヌ夫人は子どもを甘やかさず、むしろ質素な生活に慣れさせ、頑丈な体を作り上げるよう腐心している。彼女は次のように述べている。

アデルが生まれた時から3歳まで、アデルに対して私が守ってきた生活の規則は次のようなものです。冬は少し温めた水、夏は水で頭から足まで洗い、スポンジで体を擦る。カーテンのないやや硬めのベッドで、麻布のベガン帽〔顎紐つきの子ども用帽子〕と小さなキャミゾール〔下着〕だけしか身につけずに寝かせる。冬は毛布一枚だけで、夏はシャツだけ。部屋の窓は、湿気の高い時期を除いて昼間はほとんどいつも開けたままにする。暖炉の火は、昼間は適温に保ち、夜は完全に消してしまう。絶え間なく大気に触れさせる。歩くようせかさず、体を難なく持ちこたえられるほど足がしっかりするまで待つこと。[…] 離乳の頃からは、飲み物は水だけにして、クリームや粥は決して食べさせない。時折、冷たい牛乳と卵、野菜、脂っこいスープ、果物など。ジャムやボンボンやお菓子は決して食べさせない。4歳までは鯨ひげの入ったコルセットは絶対につけない。(91)

アデルに課した質素な生活は、ジャンリス夫人が実際にルイ・フィリップに課したものであった。ダルマヌ夫人はさらに、本による知識だけではなく、体験させることで理解を深める実践教育を重視した。外国語の習得に関しては、イギリス人の家庭教師を雇い、彼女と会話することで生きた外国語を学ばせている。道徳教育に関しても、善悪について正しい観念を教える時、理屈ではなく経験によって教え込むことの重要性を繰り返し主張している。例えば、子どもが嘘をついた時、叱るだけではなく、その後しばらくの間、子どもの言うこと全てを疑う振りをして、「この悪徳のもたらす不都合さ」(140)を子どもに体感させることを勧めている。アデルがタルトレットを食べ過ぎた時の対応も、同様の実践教育の一環であった。

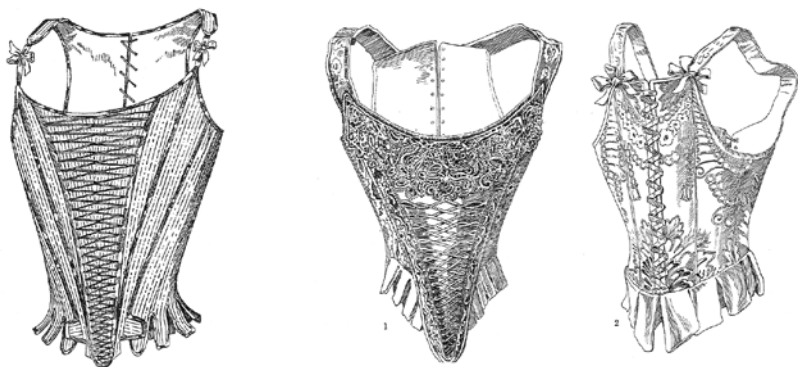
ジャンリス夫人は宗教を重んじたが、彼女の意味する宗教は霊的、または神秘的な次元ではなく、社会的次元におけるものだ。すなわち、俗世間を離れて信仰生活を送るのではなく、社会に出て貧民救済や病院の建設など慈善活動に打ち込む方に真の信仰心を見出している。彼女にとって、宗教は人間の情念を抑える力の源であると同時に、無償の献身的な行為を支える精神的基盤であった。『アデルとテオドール』では、ラガレイ氏が作り上げたユートピア的な共同体¹⁹⁾や、アデルが主宰する貧しい少女のための学校の創設²⁰⁾が、その象徴となっている。マリー＝エマニュエル・プラニョルの言葉を借りれば、ジャンリス夫人が目指したのは「信仰の世俗化²¹⁾」であった。

ところで、18世紀当時、上流階級の娘は通常修道院で教育を受けることになっていた。その教育内容は貧弱で、ゴンクール兄弟によれば、「家庭で始めた勉強の続き、先生たちの来訪、ダンスや歌や音楽のレッスン²²⁾」しかなく、他の時間は刺繍や編み物、または社交界の噂話に終始していた。「何も学ばない」修道院教育はすでに激しい弾劾的となっていたが、ジャンリス夫人も『アデルとテオドール』の中で、修道院で育てられた娘は「悪い教育が与えるあらゆる愚かさ、すなわち愚行、残酷さ、不作法、下品さ」(526)で特徴づけられると批判している。短期間修道院に滞在したアデルは、次のような感想を述べている。「もし私が修道院に入れられたら、[…]

こうした全ての欠点を持ったことでしょう」(Ibid.)。

この小説で、一つのエピソードとして挿入されるセシルの物語は、18世紀の多くの小説で取り上げられた「強制された誓願²³⁾」が主題となっている。それは、息子に全財産を相続させるために、横暴な父親によって修道尼の誓願を強制され、恋人がいるにもかかわらず、一生涯修道院生活を余儀なくされた娘の悲劇的な物語である。ダルマヌ夫人たちがセシルを救おうとするが、彼女は絶望のあまり衰弱死してしまう。このように、ジャンリス夫人は当時の修道院教育を否定的に捉えていた。

修道院教育のもう一つの弊害として、健康管理や運動、野外活動への配慮の欠如が挙げられる。当時、修道院では入浴はほぼ禁止され、娘たちは不潔な状態で放置されていた。その上、理想的な体形を保つために、寝る時ですら「^{コール}胴衣」と呼ばれる鯨ひげのコレット(図版7参照)を身につけねばならなかった²⁴⁾。それは娘たちの健康を害し、虚弱な体質を作り上げることになった。ジャンリス夫人は必ずしもコレット反対論者ではなかったが、幼い子どもにはコレットを強要せず²⁵⁾、それよりむしろ女生徒の衛生状態、栄養に配慮し、水泳など体育教育の必要性を訴えた。



図版7 左：18世紀当時のコレット(3歳児用)

中央：大人用コレット前面 右：背中側

F. リブロン・H. クルゾ『美術と風俗の中に見るコレット
—13世紀から20世紀まで—』(アテナ・プレス)より

フランス革命中の1790年には、『修道院の廃止と女性の公教育に関する弁論』を出版している。その中で、彼女は宗教者に代わって民間の有能な教師による女子教育が行われるべきだと主張している。修道院での教育の代わりに、公的教育によって各人の知的、芸術的素質を開花させようとしたのだ。この点では、ジャンリス夫人は進歩的な考えの持ち主で、「フェミニズムの先駆け²⁶⁾」ともみなされている。さらに、それまで男性の学問領域であった家政学、経済学、法律を女性も学ぶことを推奨している。

『アデルとテオドール』では、教育の対象として貴族の女性や裕福なブルジョワ女性が想定されていた。しかしフランス革命後は、ジャンリス夫人の関心は、農民のような庶民の女性にも広がっていく。1801年に出版した『女子教育のための農村学校の計画』では、農民の女性は料理や裁縫など家事労働の他に、動物の飼育に必要な知識や獣医学、植物学も学ぶべきだと主張している。それは当時としては、非常に画期的な考えであった。

しかしながら、ジャンリス夫人の庶民教育は民衆の社会的な地位の向上を目指しているわけではない。「民衆に割り当てられた役割において有能になるよう教え込む²⁷⁾」ことを目的としていた。マリー＝エマニュエル・ブラニョルはジャンリス夫人の教育観を次のように結論づけている。

教育はあらゆる年齢、あらゆる社会グループに、彼らの階級的地位がどのようなものであれ、それぞれが社会に入るための準備を整えさせることを目指している²⁸⁾。

言い換えれば、彼女は教育によって階級のない平等社会を作り出そうとしたわけではなかった。あくまでも階級の枠内で役に立つ知識の獲得を目指していたに過ぎない。18世紀の人間としてジャンリス夫人は、階級意識を最後まで持ち続けた。こうした保守性はアデルの教育の中にも見出せる。それを次に見ていこう。

6 ジャンリス夫人の良妻賢母教育とブルジョワ道徳

ダルマヌ夫人は、息子のテオドールとほぼ同じ教育、しかも百科全書的

と言える様々な分野にまたがる教育をアデルに施した。しかし、男女平等の権利を主張したわけではない。彼女はアデルの夫となるヴァルモンの母親に宛てた手紙の中で、次のように釈明している。

奥様、私の計画がアデルを^レ学者にすることだとはどうか、お考えにならないで下さい。[…] 私は娘にあらゆる事柄の非常に浅い知識だけを与えているつもりです。その知識は時には彼女の楽しみに役立ち、父親や兄または夫にこうした学問の趣味があれば、彼らの話を退屈せずに聞くことができ、無知によって必然的にもたらされる様々な些細な偏見から免れることができるでしょう。(537) [強調は作者自身]

ダルマヌ夫人がリムール子爵夫人に宛てた手紙の中でも、同様のことを述べている。

学問への好みは女性を目立たせ、[…] 気取りのない家庭の義務から引き離してしまいます。家族を導き、子どもを育て、忠告と服従を代わる代わる要求する主人に従属するように作られた女性は、それゆえ、秩序と忍耐、慎重さと正しく健全な精神を持たねばなりません。どんな種類の会話にも気持ち良く加わるよう、あらゆるジャンルの知識に通じていなければならないのです。(74-75)

ジャンリス夫人は家庭の枠の中で女性の才能を伸ばすことを目指し、社会のしきたりや両親、夫への絶対服従を尊ぶ道德教育、とりわけ「慎み深さ」と「羞恥心」に価値を置いている。後の小説『女流作家』(1802)で描かれているように、作家となって自らの才能を公の空間で発揮した女主人公は、恋人にも去られ、不幸な人生を歩むことになる。それは、女性に定められた私的空間を出て社会的栄光を求めた女性に対する罰であった。

『アデルとテオドル』では、ダルマヌ夫人はアデルに「良い妻」になる教育だけではなく、「良い母」となる実践教育も行った。彼女は、イタリアで6歳の孤児の女の子を養子にして、アデルに面倒を見させている。そして、10代の娘に6歳の女の子を育てさせる理由を次のように説明して

いる。

エルミース〔養子にした女の子〕は小さいママにすでになつき、彼女の言う事にきちんと従っています。アデルの方は、エルミースに良いお手本を示すことしか考えていません。彼女に本を読ませ、私の作ったお話をイタリア語に翻訳して学ばせています〔…〕。このように、いつか生まれる自分の初めての娘をアデルがうまく育てるための非常に簡単な方法を私は見つけたのです。彼女は私の監視のもとで、この重要な実習をすることになります。(442)〔強調は作者自身〕

ダルマヌ夫人の取った教育法は、ジャンリス夫人自身がイギリス人の女の子を引き取り、エルミースと名付けて、当時15歳の次女ピュルケリに預けたのと同じであった。それは、娘に外国語を学ばせる実践であると同時に、「良い母」となるための一種の教育実習であった。一言で言えば、ジャンリス夫人の女子教育は、良妻賢母の役割をうまく果たすためのものであった。

ダルマヌ夫人の教育によって理想的な女性に成長したアデルも結局、社交界に入り、親が予め決めた結婚相手と結婚する結末で終わっている。ダルマヌ夫人＝ジャンリス夫人にとって、アデルの女性としての自立は想定外である。腐敗した社交界から逃れて理想の教育を施したのも、社交界の罠に陥らずに節度ある生き方を教えるためで、あくまでも社交界で生きることを前提にしたものであった。クリストフ・マルタンは、ルソーの『エミール』とジャンリス夫人の小説を比較して、両者の社会的・政治的なコンセプトの違いを次のように指摘している。

『アデルとテオドール』がそのモデルを提供しているような教育は、現実を変えようを目指すどころか、社会的適応の膨大な努力となっている、確かにエミールも、世界に組み込まれることができるよう教育されたが、それは明らかに、現存の社会的規範に順応するためのものではない。逆に、社会の腐敗を再生産する仕組みから免れた最初の人物を生み出し、理想的には、彼を起点として一つの社会を再創造することを目指していた。ジャンリス夫人の小説に見られる辛抱強

い作業は、自然をその束縛から解放することにあるのではなく、逆に子どもを「社交界」^{モント}に適応させる作業である²⁹⁾。

ジャンリス夫人の場合、ルソーと違い、現実の社会体制を覆し、新しい秩序を作り出そうとするものではない。ただし、贅沢や壮麗さを見せびらかす貴族的な価値観を否定し、質素を旨として「羞恥心」と「慎み深さ」を女性の美德と考えている。ジャンリス夫人は言わば、革命後に台頭してくるブルジョワ階級の価値観を先取りしている。

さらに『アデルとテオドール』では、濃密な家族関係の中で実施される教育に、最も重きが置かれている³⁰⁾。ダルマヌ夫人とアデルの親密な母娘関係だけではなく、テオドールは17歳まで父親の部屋と一緒に寝て、眠る前に父親と長い会話を交わしていた。二人の子どもが結婚した後も、ダルマヌ夫妻は屋敷の中に彼らのための快適な居室を用意し、同居することで親子の密接な関係を続けようとしている。その上、次のようなダルマヌ夫人のセリフがある。

夫を操る妻や、父親を支配する息子は、彼らが行使する影響力を注意深く隠さなければ、軽蔑的となるでしょう。あらゆる越権行為は当然のことながら、おぞましいものですから。(138)

こうした考えは、家父長的なブルジョワ社会の価値観を代弁するものだ。ダルマヌ一家はまさに、ブルジョワ階級にとって模範的な家族モデルであった。したがって、良妻賢母教育を説くジャンリス夫人の著作が、ブルジョワ階級の覇権が確立する王政復古期から7月王政期に人気を博したのも不思議ではない。ガブリエル・ド・プログリは次のように分析している。

急速に社会的上昇を続け、裕福になっていくブルジョワ階級が支配する社会は、威厳と良識を渴望し、歴史や教育に関心を抱き、とりわけ子どものための書物の普及による教育の進歩を信じていた。ジャンリス夫人の著作は時代の好みに応じるものであった。その著作は同時代の人々の好意、時には熱狂を掻き立てるのに

必要な情熱と道徳の部分をもさに有していた³¹⁾。

ジャンリス夫人は教育論の他にも貴族階級の古いしきたりや言葉使いを詳説したエチケツト辞典を1818年に出版し、ベストセラーとなっている。彼女の著作は言わば、新興ブルジョワジーが模範とする行動指針や教育の指南書として最適であった。

おわりに

以上のように、本稿では『アデルとテオドール』におけるジャンリス夫人の女子教育論を主に見てきた。クリストフ・マルタンは「この教育学的企てが成功するために、小説の中で繰り広げられる巨大な教育装置」と、最後は政略結婚に収斂する「その目的の完全な陳腐さ」とのギャップに驚いている³²⁾。ジャンリス夫人にとって、一番の関心事は教育の目的よりはむしろ、その手段である壮大な教育プログラムを駆使することにあったのかもしれない。その顕著な例として、イタリアで出会った孤児（エルミーヌ）の境遇に同情したアデルが母親に懇願して養子縁組が実現する場面を挙げることができる。この場面は一見、旅先での偶然の出来事のように見える。しかし、エルミーヌは実は、ダルマヌ夫人が予め容姿や性格、生まれなどを慎重に調査して、100人もの貧しい孤児から厳選した少女であった。このように、アデルとテオドールが遭遇する事件や試練は全て、親が周到に準備したシナリオに基づいている。言わば、この小説はジャンリス夫人の教育実験の場であり、彼女の「統制主義的な幻想³³⁾」が生み出したユートピアの世界であった。

子どもの生活すべてをプログラム化するジャンリス夫人の教育法は、完璧に見える半面、子どもたちから夢みる時間、想像力を働かせる時間を奪い、自ら考える力を失わせてしまう危険性がある。その上、現代ならば「子どもの人権」の侵害（アデルとテオドールに限らず、とりわけ、外国の子どもを養子にして名前をフランス語化し、有無を言わさずこの教育実験に参加させていること）が問題になるかもしれない。それがジャンリス夫人

の教育の問題点と言えよう。

しかしながら、『アデルとテオドール』の再版の折に付け加えた序文の冒頭で、「この作品は15年にわたる考察と観察の成果であり、子どもたちの性癖や欠点、策略を終始一貫して研究してきた成果による」(49)と作者が宣言しているように、事実裏付けられた虚構、現実と虚構の錯綜とその不可分性がジャンリス夫人の特徴である³⁴⁾。そこに、理論のみに終始する男性の教育論者〔例えばルソーは『エミール』で理想的な教育を論じたが、現実には自らの子ども5人とも「捨て子」にしたことで有名である〕とは一線を画し、実際に子育てを経験した女性の教育者の自負が見出せる。

【註】

- 1) ジャンリス夫人の生涯および、彼女がルイ・フィリップに施した教育に関しては、拙論「ジャンリス夫人の生涯とその思想」、『人間科学 大阪府立大学紀要』5号、2010年を参照のこと。
- 2) スタンダールの妹への推薦図書として、ジャンリス夫人の *L'Enthousiasme et les vœux téméraires* と *Mlle de Clermont* を挙げている (Stendhal, *Correspondance*, Gallimard, t. I, Paris, 1962, p. 293)。スタンダールの書簡に関しては、山本明美氏にご教示いただいた。
- 3) 『アデルとテオドール』に登場するダルマヌ男爵夫人（二人の子どもに理想的な教育を施す母親）は作者の分身であり、シュルヴィル夫人はモンテッソン夫人がモデルとされている。モンテッソン夫人は、シュルヴィル夫人の性格描写（学識を衒った女性として否定的に描かれている）は彼女を侮辱したものだと怒りを露わにした (Cf. Isabelle Brouard-Arends, Note 66 d'*Adèle et Théodore*, Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 2006, pp. 645-646)。
- 4) Madame de Genlis, *Mémoires*, t.VIII, p.248, cité par Alice M. Laborde, *L'Œuvre de Madame de Genlis*, Nizet, Paris, 1966, p. 193.
- 5) Madame de Genlis, *Le petit La Bruyère*, cité par Suellen Diaconoff, « Feminized Virtue: Politics and Poetics of a New Pedagogy for Women », in *Papers on French Seventeenth-Century Literature*, n° 46, 1997, p. 128.
- 6) Madame de Genlis, *Adèle et Théodore, ou lettres sur l'éducation, contenant tous les principes relatifs aux trois différents plans d'éducation des Princes et des jeunes personnes de l'un et l'autre sexe*, Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 2006, p. 410. 『アデルとテオドール』からの引用は全てこの版か

らで、今後、本文中に頁数のみを記す。

- 7) Christophe Martin, « Sur l'éducation négative chez M^{me} de Genlis (*Adèle et Théodore, Zélie ou l'Ingénue*) », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, Publications des Universités de Rouen et du Havre, Rouen, 2008, p. 52.
- 8) Didier Masseau, « Pouvoir éducatif et vertige de la programmation dans *Adèle et Théodore* et quelques autres ouvrages », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, p. 30.
- 9) *Ibid.*, p.31.
- 10) Jean-Jacques Rousseau, *Émile, Œuvre complètes*, Pléiade (Gallimard), t.IV, Paris, 1969, p. 693.
- 11) 水田珠枝『女性解放思想史』、ちくま学芸文庫、1994年、85頁。
- 12) Madame de Genlis, *De l'influence des femmes sur la littérature française, comme protectrices des lettres et comme auteurs ; ou précis de l'histoire des femmes françaises les plus célèbres*, Maradan, Paris, 1811, p. xiv.
- 13) Cf. Gabriel de Broglie, *Madame de Genlis*, Perrin, Paris, 1985, p.137. ランベール夫人の女子教育論に関しては、赤木昭三、赤木登美子『サロンの思想史』、名古屋大学出版会、2003年、279-282頁を参照のこと。
- 14) Gabriel de Broglie, *op. cit.*, p.137.
- 15) ジャンリス夫人はお伽話の多くが恋愛を主題とし、その魅惑的な世界が子どもたちの想像力を過度に掻き立てるとして、子どもに読ませるには危険だと考えていた。それゆえ、道徳的教訓を盛り込んだ子ども向けの物語集『城の夜のつどい』（夜寝る前に子どもたちに母親が語る物語）を1782年に出版し、好評を博した。
- 16) ジャンリス夫人の『少女のための戯曲』（1779）は、男役抜きで、恋愛の要素の入らない新しいジャンルの教育劇で、グリムからも「主題の無垢性」を絶賛された（Grimm, *Correspondance*, Garnier, Paris, 1880, vol.VII, p. 275, cité par Alice M. Laborde, *op.cit.*, p. 29）。
- 17) Didier Masseau, *op. cit.*, p. 33.
- 18) ジャンリス夫人のフィロゾフ派への批判に関しては、François Bessire, « M^{me} de Genlis ou l'« ennemie de la philosophie moderne » », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation* を参照のこと。
- 19) ラガレイ氏は愛娘の死後、人類愛に目覚めて慈善活動に打ち込むようになる。彼は工場を建てて貧しい職のない人々に働き口を与え、不毛な土地を開拓して農地に変え、広大な城を改造して劇場を病院に、豪華な庭園を菜園に変えて人々を養い、村の子どもたちには読み書きを教える学校を作

などユートピア社会を実現した。ダルマヌ男爵は息子のテオドールに次のように言っている。「決してこの偉大な人物 [=ラガレイ氏] を忘れてはいけない。彼の崇高な徳を思い出す時には、宗教と信仰心のみがこの完全な無私の心に導くことができるということを心に銘じておきなさい」(291)。

- 20) ダルマヌ夫人は親しい友人に出資を募り、そのお金で小規模の学校を作り、そこで6人の貧しい少女たちに10歳から17歳まで読み書きや計算、刺繍など手仕事を教え、卒業後の働き口を世話した。アデルは学校の規則を作り、少女たちが使うキリスト教および道德教育の本を書く役目を担った。
- 21) Marie-Emmanuelle Plagnol, « Le théâtre de M^{me} de Genlis. Une morale chrétienne sécularisée », in *Dix-huitième siècle*, n° 24, 1992, p. 369.
- 22) ゴンクール兄弟、『ゴンクール兄弟の見た18世紀の女性』、鈴木豊訳、平凡社、東京、1994年、25頁。
- 23) 同上、19頁。
- 24) Cf. アラン・ドゥコー、『フランス女性の歴史3 革命下の女たち』、渡辺高明訳、大修館、東京、1987年、8-9頁。
- 25) 前述の引用文最後に「4歳までは鯨ひげの入ったコルセットは絶対につけない」とあるように、ジャンリス夫人は少なくとも4歳まではコルセットをつけさせることに反対であった。
- 26) Gabriel de Broglie, *op. cit.*, p.139.
- 27) Machteld De Poortere, *Les idées philosophiques et littéraires de Mme de Staël et de Mme de Genlis*, Peter Lang, New York, 2004, p. 36.
- 28) Marie-Emmanuelle Plagnol, *op. cit.*, p.375.
- 29) Christophe Martin, *op. cit.*, pp. 56-57.
- 30) 当時の貴族社会では、子どもの世話は乳母や家庭教師に任せ、親は子どもとほとんど顔を合わせることもなかった。19世紀においても同様で、バルザックの『二人の若妻の手記』(1842)では、名門貴族の娘ルイズ・ド・ショーリュールと両親との希薄な親子関係が描かれている。
- 31) Gabriel de Broglie, *op. cit.*, p. 364.
- 32) Christophe Martin, *op. cit.*, p. 57.
- 33) Didier Masseur, *op. cit.*, pp. 34-35.
- 34) 現実と虚構の錯綜の顕著な例として、小説の中でジャンリス夫人自らの著書に言及していること、さらに『アデルとテオドール』の著書自体が、最後にダルマヌ夫人から結婚したアデルに与える贈り物となることが挙げられる。また、この小説で展開される教育プログラムのほとんどは、ジャンリス夫人がルイ・フィリップに実際に課したものであった。